

富大考古通信



第 18 号

昆布ロードとヒスイロード

総務省の家計調査によれば、2013（平成 25）年富山市における一世帯当たりの昆布購入金額が、京都市に抜かれて初めて2位に陥落し、1960年の調査開始以来53年間、首位の座を守り続けてきた富山市民をはじめ多くの富山県民は、この結果に大きな衝撃を受けた。

27年前、JR富山駅に初めて降り立った私は、土産物売り場で羅臼昆布が平然と売られている様を見て、なぜ昆布がお土産になるのか、ましてや北海道産ではないかと、大きな違和感を抱いたものだ。富山に住んでみてようやく分かったが、昆布はそれほど県民のくらしに深く浸透したものであり、おぼろ昆布を巻いた「昆布おにぎり」、「昆布かまぼこ」、サスや白エビ、山菜等の「昆布締め」など、今や富山県民のソウルフードとなっている。

富山と昆布との深い関係は、江戸時代の北前船交易にさかのぼる。蝦夷地（北海道）を出立した北前船は、西廻航路をとって日本海側を進み、初期には敦賀から陸揚げして琵琶湖経由で、また江戸時代中期以後は下関を廻るルートで、最終目的地の大坂（大阪）へ廻船された。北海の昆布やニシンなどを日本海側の主要な湊へ輸送して売りさばき、また空きスペースには各地の産物を次々と積み込んで、「天下の台所」大坂で商いし、そして復路には北陸の米、酒、材木、雑貨等を大量に積載して蝦夷地で売り払い、差益をあげるのである。昆布は薩摩藩を介してさらに琉球にも運ばれた。うま味の素であるグルタミン酸、またヨウ素や食物繊維が豊富に含まれる昆布は味よく、健康にもよく、寄港地の各地で独自の昆布食文化を花咲かせたが、とりわけ現在の富山に根付いたのは、蝦夷地へ渡って漁場を開拓した郷土の先達のご苦労によるところが大きいという。

希少価値の高い北海の産物が北陸さらには西日本へ、逆に復路には米や酒、雑貨等が蝦夷地へとダイレクトに近い形で運ばれるところに北前船交易の画期的な点があった。では、これ以前の交易はどのようなものであったか。中世には、各地の船主が所有する数百石積み程度の中型船が地方の湊の間を行き来する、いわばローカルな交易が主であった。このようなローカルな交易が連鎖することで、珠洲焼や越前焼をはじめとする陶磁器や各地の産物が遠くまで運ばれていった。

さらに古い時代には、造船技術や航海技術は未発達であり、船が着岸する停泊地も未整備で、一度の航海で運ばれる物品の数量も、移動距離も自ずと限られる。互惠交易（互酬）が基本の時代には、それゆえに数百kmも離れた所まで運ばれていった物品は多くはないと考えられるが、希少価値の高いものの中にはかなり遠くまで運ばれた例が知られる。その代表例が、北は北海道から南は沖縄まで分布する縄文時代の糸魚川産ヒスイである。ヒスイは完成品または原石の形で運ばれたが、直接採取が困難な遠隔地出土のものは交易拠点となる集落の集団間をリレー式に運ばれたと考えられる。だとすれば、通常は遠くへ行くほど数量が減少したり、あるいは品質が落ちたり、また二次的利用品として出土するはずである。現に、沖縄出土のものは九州の集団を介して持ち運ばれた二次的利用品であるこ

とを証明した。しかし、青森・北海道ではかなりの数量のヒスイが出土しており、なぜこの地に集中するのか、全容が解明されたわけではない。

前近代、日本海側を主な舞台に、遠距離交易が展開された。ヒスイロードは互恵交易、昆布ロードは主に商品交易によるものであり、互恵交易の歴史や変遷、また互恵交易と再分配交易、商品交易との関係を考える上で、日本海側は重要なフィールドである。

(高橋 浩二)

参考文献

高橋浩二 2005「沖縄県出土のヒスイについて」『ヒスイ製品の流通と交易形態に関する経済考古学的研究』

平成 15～16 年度科学研究費補助金若手研究(B) 研究成果報告書

富山県経営管理部統計調査課生計農林係 2014『平成 25 年家計調査の結果概要―富山市の家計―』

目次

昆布ロードとヒスイロード

高橋浩二

卒業論文要旨

「北陸における石棒祭祀」

小林史佳

「北陸地方における馬具出土古墳の様相」

吉田皓

「古代の北陸における祭祀遺跡の研究―木製祭祀具の出土遺跡から―」

岡山充味

「富山県における中世の井戸祭祀」

菅野友希

「建物から見た加賀と能登の荘園に関する考察」

三宅克幸

卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

卒業論文要旨

北陸地方の石棒祭祀

小林史佳

石棒は縄文時代前期末に出現し、中期に盛行・大型化、晩期に小型化する棒状の石製品であり、その形状から祭祀遺物と考えられ用途が様々に推測されている。

石棒について研究史を概観すると、北陸地方を中心とした地域を対象とした研究は少ないということが分かった。

そこで私は北陸地方を中心に石棒の出土遺構や出土状況、出土量を調べることで北陸地方における石棒の使用のあり方を明らかにし、他の地域と比較していく中で北陸地方の石棒祭祀の特色を検討したいと考え、本論の目的とした。

分析の対象とする石棒は北陸三県（新潟・富山・石川）の遺跡において遺構より出土したものとした。対象遺跡は新潟県 8 遺跡、富山県 11 遺跡、石川県 3 遺跡のあわせて 22 遺跡である。

分析の結果、北陸地方では主に新潟・富山県で遺構出土石棒が多数出土することが分かった。中期から晩期まで存在するが、特に後期に出土数が多い。14 種類の遺構から石棒の出土が確認されており、研究史で挙げられていた主な 6 遺構より多くの遺構と関係があることが分かった。その中でも、新潟県においては配石遺構、富山県・石川県においては住居、土坑からの出土が多かった。また、骨片、祭祀遺物などの共伴遺物や遺構・遺物の状態から検討した結果、住居址・配石遺構・土坑は遺構に関係したものと、ないものに分かれることが分かった。

分析結果をふまえて地域と時期、石棒の状態、出土遺構の観点から考察を行った結果、地域と時期の観点から、遺構からの石棒の出現時期は西日本とほぼ同じであるが、中期は屋内、後期以降は屋外からの出土が多いという傾向は東日本と似ていることが分かった。石棒の状態の観点から、対象とした石棒の多くが破損しているが、住居址出土のものに関しては完形品が多い。しかし、出土状況より祭祀における石棒の使用のあり方を推測できる例は非常に少なかった。出土遺構の観点から、北陸地方において土坑・配石遺構からの出土が際立って多いが、配石遺構出土石棒に関しては転用が、土坑出土石棒に関しては流入したものがほとんどであり、祭祀との関連があるものは少ないことが分かった。また、富山県においては水場、溝、谷など水に関係する、または捨て場と考えられる場所からの出土も多く、水場で祭祀を行った、または祭祀後にこれらの場所に遺棄していた可能性があることが分かった。

本論では石棒の形態による出土状況の違いに全く触れることができなかつたこと、出土する遺構の特徴や遺構に伴う祭祀方法などについて具体的に述べるができなかつたこと、西日本の石棒祭祀に関して資料が少なく、細かな分析ができなかつたことなど課題が残ってしまった。今後の研究では石棒の型式に関しても触れ、遺構ごとに出土する石棒にはどのような特徴があるのか、遺構自体にはどのような特徴があるのかということ詳しく分析すれば、また、西日本での資料がより得られるようになれば、より具体的に北陸地方の石棒祭祀の特徴を見つけることができると思う。

日本列島において、乗馬の風習が普及したのは古墳時代中期の 5 世紀とされ、それに伴って馬に装着される馬具が古墳から出土する例も増加する。馬具は製作にあたって金工、木工、皮革加工など当時の技術を総合的に結集する必要があり、特に馬具導入初期において、入手が可能だったのは一部の有力者に限られる。馬具を出土する古墳の様相の研究は、古墳時代の権力者の分布と勢力を知るうえで重要な手がかりとなる。

北陸地方において、これまで重視されてこなかった中小規模古墳を含む北陸地方の馬具出土古墳と出土馬具を整理することで、当該地方の権力者層の分布とその推移を検討していくことが目的である。

分析の対象とする遺跡は、新潟県から福井県に存在する馬具を出土した 41 基の古墳で、轡（くつわ）や鏡（あぶみ）など各種の馬具を分析対象遺物とした。分析方法としては、出土馬具について形態、共伴遺物など詳細なデータをまとめて馬具の型式分類と年代推定を行い、その結果と馬具出土古墳の所在地を合わせる方法を用いた。5 世紀半ばから 7 世紀代までの時期ごとの馬具出土古墳の分布状況、出土馬具の型式を明らかにすることで、当時の有力者層の様相を検討した。

分析の結果、北陸地方の馬具の導入には以下の 4 段階が考えられる。北陸地方に馬具が導入された初期に当たり、越後・越前・若狭にそれぞれ外部地方から馬具が導入された 5 世紀半ば～後半を第 1 段階とした。北陸地方ほぼ全域の、一定以上の規模を有する首長墳に、朝鮮半島的な性格を持つ金銅張の馬具が行き渡った 6 世紀前半を第 2 段階とした。第 3 段階として、前方後円墳の築造が行われなくなった影響により、中小規模円墳に実用的な鉄製馬具を納め始める 6 世紀半ばを設定した。第 4 段階に当たる 6 世紀後半～7 世紀代には、それまで分布の中心だった若狭地域に馬具出土古墳が見られなくなり、代わって越前地域が中心となる。特に越前地域において、畿内政権的な性格を持つとされる金銅張国産馬具を群集墳中の円墳に納める例が北陸各地域で増加する。

以上のことから本地方の有力者像について、朝鮮半島など外部志向の大きな勢力を持った首長から、畿内政権の支配下に置かれた首長へ変化していくという傾向を窺うことができる。また鉄製馬具の形式に注目すると、第 3 段階以降に環状鏡板付轡と三角錐形壺鏡との共伴例が一定数見られる。ここから、実用的な馬具のセット関係にある程度想定することができる。

しかし、馬具とともに変化すると考えられる石室構造やその他の共伴遺物などの変遷、出土馬具のセット関係、古墳当たりの馬具出土数量について検討を行うことができなかった点を今後の課題としたい。

古代の北陸における祭祀遺跡の研究

—木製祭祀具の出土遺跡から—

岡山充味

古代における祭祀とは律令制によって規定されるものであり、また律令祭祀で幅広く使用されている木製祭祀具も、基本的には同じ様相を示すものとされている。しかし、各国単位でみると必ず同じ様相を示すとは言い難い部分もあり、隣り合った地域であっても異なる様相を示すことが多々ある。これについてはその遺跡が国府や郡家、郷などのいずれに所属しているかで決まるとする研究がある一方で、その遺跡で行われた祭祀の内容で異なるとする研究などがあり、どれが正しいのかについて知りたいと考えた。

そこで今回は、出土遺跡の様相と木製祭祀具の出土数、その他の祭祀具との関係などから木製祭祀具を使用した祭祀の主体及び祭祀の内容について考えることとした。対象とする遺跡は、北陸地方の特に木製祭祀具が多く出土している富山県・石川県の中で、溝や窪地などの遺構から木製祭祀具が計 10 点以上出土した 11 遺跡とした。対象とする遺物は、木製の斎串及び人形などの形代類及び人面墨書土器、文字資料、金属製祭祀具などである。

分析方法は、まず各遺跡で木製祭祀具が出土した遺構及び木製祭祀具を含む遺物のデータについてまとめ分析し、一部の木製祭祀具で型式分類を行った後、木製祭祀具の出土数や墨描表現の有無及び型式について分析した。そして、各遺構のおおよその祭祀時期と古代北陸地方の出来事と関連させてまとめ、木製祭祀具を使用した祭祀の主体及び内容を考察した。

分析の結果、木製祭祀具を使用した祭祀は多くの遺跡で墾田永年私財法の出された 8 世紀中頃にはほぼ一律で始まり、荘園整理令が出される 10 世紀初頭までには廃絶することが分かった。墨描表現のある木製祭祀具は、木製祭祀具が多く出土した遺跡であっても多く出土するとは限らず、異なる祭祀が行われた可能性があることが分かった。また、木製祭祀具とともに出土したその他の祭祀具の内、都城的要素の強い人面墨書土器が出土した遺跡に関しては中央との何らかの関連が、鈴などの金属製祭祀具が出土した遺跡では渤海使・遣渤海使などとの関連がある可能性があることが分かった。

以上のことから、木製祭祀具を使用した祭祀の主体は、ほとんどの遺跡で中央や寺院及び荘園と関わりのあるその地域の有力者と考え、祭祀の内容としては墨描表現のない木製祭祀具を多く出土した遺跡では不特定多数の人物に向けた祓や農耕祭祀などが、墨描表現のある木製祭祀具を多く出土した遺跡では律令制にのっとり特定の人物に対しての祓などが行われたと考えられる。しかし、一回の祭祀で使用される木製祭祀具の組成などについては検討に至らなかったため、今後の課題としていきたい。

富山県における中世の井戸祭祀

菅野友希

井戸内からは、齋串や銭貨等の遺物が出土することがあり、それらは井戸祭祀に関係があるという見解がされている。井戸祭祀とは、井戸の掘削時・使用時・埋め戻しの際に行われる祭祀であり、雨乞いや僻邪等様々な意味で行われる。

私は石川県西川島遺跡群から、故意に打ち欠かれた水瓶や人形等が出土しており、これらは井戸祭祀に使用されたものであるということを知り、井戸祭祀に興味を持った。

また、石川県や新潟県においては井戸祭祀の研究が進められているが、富山県においてはあまり研究が行われていない印象を持った。よって今回は、富山県の井戸祭祀が行われた遺跡を集成し、富山県内ではどのような井戸祭祀が行われ、どのように伝播していったかを明らかにしていく。

分析方法は、先行研究で明らかにされている井戸祭祀に使用される遺物を参考とし、齋串・形代・柄杓等の 11 種の遺物を集成し、対象遺物とした。この対象遺物が出土している井戸として、27 遺跡 115 基を取り上げ、この井戸祭祀が行われた井戸の出土遺物、時期、地域で分布図を作成し比較した。また、遺物ごとにグラフを作成し、井戸祭祀が行われた井戸基数や出土遺物における時期的変遷を比較した。

分析の結果、井戸祭祀は富山県内で広く分布していることが明らかとなった。また、形代類、呪符、息抜き竹を使用した祭祀は広い分布を示すが、地域的な特徴や伝播の様子等は不明瞭であった。土師器皿を使用した祭祀については、在房遺跡と井口 A 遺跡の 2 遺跡と地域が限定されているため、この地域独特の祭祀かと考えたが、時期差があるため明確ではない。柄杓は、時期により 3 グループに範囲を分けることができた。海沿いの 1 グループから、14 世紀～15 世紀の 2 グループへ伝播し、15 世紀～16 世紀の 3 グループへ伝わったものと考えられる。

時期的変遷に関しては、富山県における井戸祭祀の初現は滑川市魚躬遺跡で、井戸祭祀は 13 世紀から 14 世紀に最も盛んに行われ、16 世紀を境に減少していくことが明らかとなった。また、15 世紀には呪符木簡、息抜き竹の出土がみられなくなる一方で、形代類、箸状木製品、刀子などを使用した祭祀が多く行われていることも明らかにすることができた。特に 15 世紀については、それまで見られなかった祭祀や、途絶えていた祭祀が再び行われていることから、井戸祭祀における思想の変化が起こったのではないかと考えた。

今回は、井戸祭祀がどの段階で行われたものであったかを明らかにすることができなかった。また、年代を報告書に頼っており、絶対年代を短い時間幅で特定することや、時期不明な井戸の年代の推測することが不十分であった。よって出土状況を詳しく調べ、どの段階で行われた祭祀であるかを検討するとともに、共伴した土器の編年などから井戸祭祀の行われた時期を推定していく必要があると考えている。

平成 26 年度富山大学考古学研究室卒論発表会

日時：2015 年 3 月 1 日（日）13 時～

場所：富山大学人文学部 2 階 第 4 講義室

当日のスケジュールは以下の通りです。（順番が入れ替わることもあります。）

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がございましたら 076-445-6195（富山大学考古学研究室）もしくは
tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください

【卒業論文】

- ①小林史佳「北陸における石棒祭祀」
- ②吉田皓「北陸地方における馬具出土古墳の様相」
- ③岡山充味「古代の北陸における祭祀遺跡の研究 一木製祭祀具の出土遺跡から一」
- ④菅野友希「富山県における中世の井戸祭祀」
- ⑤三宅克幸「建物から見た加賀と能登の荘園に関する考察」

追い出しコンパのお知らせ

春の陽気が待ち遠しい今日この頃、みなさまいかがお過ごしでしょうか。

さて、富山大学考古学研究室では、3月1日（日）の卒業論文発表会の後に追い出しコンパを開催します。ご多忙中かとは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月1日（日）

場所：一次会…九州男児富山駅前店 時間 18～20時 会費 6500円

二次会…せん富山駅前店 時間 20～22時 会費 2200円

※参加を希望される方は2月25日までに tomidai_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承ください。

一次会と二次会の場所については、以下の地図をご覧ください。

一次会 九州男児富山駅前店



二次会 せん富山駅前店



編集後記

寒さ暑さも彼岸までと申しますが、まだまだ寒い日が続いております。

2月も終わりに近づき、そろそろ春の足音が聞こえてまいりました。春は先輩方とお別れをする季節、そして新しく2年生を研究室に迎える、うれしくも寂しい季節です。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。これから困難も多いかと思いますが、しっかりと自らの道を進んでいかれることをお祈りしております。

今年の春からは、2年生が5人入ってきます。新しい仲間を迎えて、研究室がますます楽しく、そしてみんなで協力して学ぶことができる場となるよう、一同頑張っております。

(北岡さゆり・津田明恵)

富大考古通信 第十八号

配信日 2015年2月20日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

メール tomidai_kouko@yahoo.co.jp

※メールにつきましては、迷惑メールと区別するため、タイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力してください。ご協力お願いいたします。